

かの女の朝

岡本かの子

青空文庫

K雑誌先月号に載ったあなたの小説を見ました。ママの処女作というのですね、これが。ママの意図としては、フランス人の性情が、利に鋭いと同時に洗練された情感と怜悧さで、敵国の女探偵を可愛ゆく優美に待遇する微妙な境地を表現したつもりでしょう。フランス及びフランス人をよく知る僕には——もちろんフランス人にも日本人として僕が同感し兼ねる性情も多分にありますが——それが実に明白に理解されます。そして此の作はその意味として可なり成功したものでしょう。だが、これは僕自身としてママへの希望ですが、ママは何故、ひとのことなんか書いて居るのですか。ママにはもつと書くべき世界がある。ママの抒情的世界、何故其処の女主人公にママはなり切らないのですか。ひとのこと処ではないでしょう。ママがママの手を動かして自分の筆を運ぶ以上、もつと、ママに急迫する世界を書かずには居られないはずです。それを他国の国情など書いて居るのは、やっぱりママの小児性が、いくらが見せかけの気持ちに使われて居るからです。ママ！ママは自分の抒情的世界の女主人に、いつもいつもなつて居なさい。幼稚なアンビシユに支配されないで。でなければ、小説なんか書きなさいますなよ。

かの女の息子の手紙である。今、仏蘭西フランス巴里パリから着いたものである。朝の散歩に、主人逸作いつさくといつものように出掛けでかようとして居る処ところへ裏口から受け取った書生しよせいが、かの女の手に渡した。

逸作はもう、玄関こまげに出て駒下駄こまげを穿はいて居たのである。其処へ出合いがしらに来合わせた誰かと、玄関とびらの扉を開けた処で話し声をぼそぼそ立てて居た。

かの女は、まことに、息子に小児性と呼ばれた程ほどあつて、小児の如く堪こたえ性が無なかつた。主人逸作が待つて居いそうでもあつたが、ひとと話をして居るのを好よいことにして、息子の手紙の封筒を破つた。そして今のような文面にいきなり打突ぶつかつた。

だが、かの女としては、それが息子の手紙でさえあれば、何でも好こかつた。小言こいごであるうと、ねだりであろうと、（だが、甘えの時は無かつた。息子は二十三歳で、十代の時自分を生なんだ母の、まして小児性を心得て居て、甘えるところではなくて、母の甘えに逢あつては叱しかつたり指導したりする役だつた。普通生活には少しだらしなかつたが、本当は感情的で頭の鋭い正直な男子だつた。）そしてやつぱり一人息子にぞつこんな主人逸作への良き見舞品となる息子の手紙は、いつも彼女は自分きが先さきに破るのだった。

— あら竹越さんなの。

逸作と玄関で話して居たのは、かの女の処へ原稿の用で来た「文明社」の記者であった。

— はあ、こんなに早く上つて済みませんでしたけれど……。その代りめつたにお目にかかれない御主人にお目にかかれました……。。

竹越氏が正直に下げる頭が大げさでもわざとらしくはなかった。逸作は好感から微笑してかの女と竹越との問答の済むのを待つて、ゆつくり玄関口に立つて居た。

竹越氏が帰つて行つた。二人は門を出て竹越氏の行つた表通りとは反対の裏通りの方へ足を向けた。

— 今の記者何処のだい。

— あら、知らないの、だつて親し相に話して居なすつたじゃないの。

— だつて向うから親しそうに話すからさ。

— 雑誌が大変よくつてなんて仰つて居たじゃないの。

— だつて、記者への挨拶ならそれよりほか無いだろう。

— 何処の雑誌か知らなくつても？

— そうさ、何処の雑誌だつておんなじなもの。

——あれだ、パパにやかないませんよ。

かの女は自分のことと較べて考えた。かの女はいつか或る劇場の廊下で或る男に挨拶された。誰だか判らなかつたが、彼女は反射的に頭を下げた。だが、知らない人に頭を下げたことが気になつた。そしてやつぱり反射的にその男のあとを追つた。広い劇場の廊下の半町程もその男のあとを追つて

——あなたは、何誰でしたか。

と真面目で男の顔を見て訊いた。男はかつて、かの女の処へは逸作の画業に就いての用事で、或る雑誌社から使いに來た人だつた。男は、かの女が其の時の真面目くさつて自分の名を訊いた顔を忘れないと方々で話したそうだ。だが、それも、五六年前だつた。画業に於て人気者の逸作と、度々銀座を歩いて居るとき、逸作が知らない人達に挨拶をされても鷹揚に黙々と頭を一つ下げて通過するのを見習つて、彼女もいつまで、自分のそんな野暮なまじめを繰り返しても居なかつたが、今朝の逸作が竹越氏に対する適応性を見て、久しぶりで以前の愚直な自分を思い出した。

——痛つ。

かの女は駒下駄をひっくり返えした。町会で敷いた道路の敷石が、一つは角を土から

によつきりと立て、一つは反対にのめり込ませ、でこぼこな醜態しゆうたいに変かわつて居るのだ。裏町で一番広大で威張いばつて居る某富豪ふごうの家の普請ふしんに運ぶ土砂どしゃのトラックの蹂躪じゆうりんの為ために荒された道路だ、——良民りようみんの為ために——の憤りいきんおも幾度か覺えた。だが、恩恵もあるのだ。

——ねえパパ、此この〇家の為ために我々は新鮮な空氣が吸える、と思えば氣おさまも納るね。

——まあ、そんなものだ。

二人は歩きながら話す。

實際〇家は此の町の一端何町四方を邸内に採つて居る。その邸内の何町四方は一ぱいの樹海じゆかいだ。緑の波が澎湃ほうはいとして風にどよめき、太陽に輝やき立つて居るのである。ベルリンでは市民衛生の為ために市中に広大なチーヤガルデン公園を置く。此この富豪は我が町に緑樹の海を置いて居る。富豪自身は期せずして良民の呼吸の為ためにふんだんな酸素を分配して居るのである。——ものの利害はそんな処ところで相あい伴ともない相償あいづぐなつて居るといふものだ。——と二人はお腹なかの中で思い合つて歩いて居るのだ。

二三丁行くと、或ある重役邸の前門の建て換え場だ。半月も前からである。

——変な男女にんぶが、毎朝、同じ方向から出かけて来ると思つて居るだろうね、人夫達にんぶが。

と、かの女。

——ふん。

逸作は手を振って歩いて居る。中古の鼠色縮緬の兵児帯が、腰でだらしなくもなく、きりつとでもなく穩健に締まっている。古いセルの単衣、少し丈が長過ぎる。黒髪が人並よりぐつと黒いので、まれに交っているわずかな白髪が、銀砂子のように奇麗に光る。中背の撫で肩の上にラファエルのマリア像のような線の首筋をたて、首から続く淨らかな顎の線を細い唇が締めくくり、その唇が少し前へ突き出している。足の上る度に脂肪の足跡が見える中古の駒下駄でばたりばたり歩く。

かの女は断髪もウエーヴさえかけない至極簡単なものである。凡そ逸作とは違つた体格である。何処にも延びている線は一つも無い。みんな短かくて括れている。日輪草の花のような彫大な眼。だが、気弱な頬が月のようにはにかんでいる。無器用な小供のように卒直に歩く——実は長い洋行後駒下駄をまだ克く穿き馴れて居ないのだ。朝の空気を吸う唇に紅は付けないと言いつて居るその唇は、四十前後の体を身持ちよく保つて居る健康な女の唇の紅さだ。荒い銘仙緋の単衣を短かく着て帯の結びばかり少し日本の伝統に添っているけれど、あとは異人女が着物を着たようにぼやけた間の抜けた着かたをし

て居る。

——ね、あんたアミダ様、わたしカンノン様。

と、かの女は柔かく光る逸作の小さい眼を指差し、自分の丸い額を指で突いて一寸氣取つては見たけれど、でも他人が見たら、およそ、おかしな一對の男と女が、毎朝、何処へ、何しに行くと思うだろうとも氣がさすのだった。うぬ惚れの強いかの女はまた、莫迦莫迦しくひがみ易くもある。だが結局人夫は人夫の稼業から預けられた土塊や石柱を抱え、それが彼等の眼の中に一ぱいつまっているのだ。その眼がたまたまぬすみ視した処が、それは別に意味も無い傍見に過ぎないと、かの女は結論をひとりでつける。そして思いやり深くその勞役の彼等を、あべこべに此方から見返すのであつた。

陽気で無邪気なかの女はまた、恐ろしく思索好きだ。思索が遠い天心か、地軸にかかっている時もあり、優生学や、死後の問題でもあり、因果律や自己の運命觀にもいつかつながる。喰べ度いものや好い着物についてもいつか考え込んで居る。だが、直ぐ氣が變つて眼の前の売地の札の前に立ちどまって自分の僅かな貯金と較べて価格を考えても見たりする。

かの女は今、自分の住宅の為にさして新らしい欲望を持って居ないのを逸作はよく知つ

て居る。かの女が仮想かそうに楽しむ——巴里パリに居る独息子ひとりが帰つたら、此この辺あたりへ家を建てて遣やろうか、若もしくはいつかな帰ろうとしない息子にあんな家、斯こんな家でも建てて置いたら、そんな興味がが両親への愛着まじにも交り、息子は巴里から帰りはしないか。あちらで相当な位置も得、どう考えてもあちらに向いて居る息子の芸術の性質を考えるとこちらへ帰つて来るようには言えない。またかの女の芸術的良心というようなものが、それは息子の芸術へというばかりでないもつと根本の芸術の神様に対する冒瀆ぼうとくをさえ感ずる。芸術的良心と私的本能愛との戦いにかの女はまた辛つらくて涙が眼にに滲にじむ。息子の居ない一ヶ所空からっぽうのような現実の生活と、息子の帰つて来た生活のいろいろな張り合いのある仮想生活とがかの女の心にに代かわる代かわる位置を占めるのである。かの女は雑草が好きだ。此の空地あきちにはふんだんに雑草が茂かつて居る。なんぼ息子の為にに建ててやる画室がでも、かの女の好みの雑草は取とつてしまふまい。人は何故なぜに雑草と庭樹にわきとを区別する権利があつたのだらう。例えば天上の星のように、瑠璃るりを点ちずる露草つゆくさや、金銀の色いろいと糸いとの刺繡ししゅうのような藪蔓草やぶつるくさの花をどうして薔薇ばらや紫陽花あじさいと誰が区別をつけたらう。優雅な蒲公英たんぽぽや可憐かれんな赤まま草を、罌粟けしや撫子なでしこと優劣ゆうれつをつけたらう。沢山たくさん生はえる、何処どこにもあるからということが価値の標準となるすれば、飽あきつぽくて浅あせはかなのは人間それ自身なのではあるまいか。だが、か

の女が草を除らないことを頑張れば息子も甘酸っぱく怒って、ことによつたらかの女をス
 ポーツ式に一つ位いはどやすだろう。そしたらまあ、仕方が無い、取つても宜い。どやす
 と言え、かの女が或時息子に言つた。「ママも年とつたらアイノコの孫を抱くのだね、
 楽しみだね」と、極々座興的ではあつたけれど或時かの女がそれを息子の前で言つて
 どやされたことをかの女は思い出した。どやした息子の青年らしい拳の弾力が、かの女の
 背筋に今も懐かしく残っている。その時息子は言つた。「子を生むようなフランス女とは
 結婚しませんよ。」それはフランス女を子を生む實用にしないと言うのか、或は子を生む
 ような実用的なフランス女は美的でないと言う若者の普通の美意識から出た言葉か知らな
 かつたが、それも今では懐かしくかの女に思い返されるのであつた。六年前連れて行つて
 かの女と逸作が一昨年帰える時、息子ばかりが巴里に残つた。

かの女が分譲地の標札の前に停つて、息子に対する妄想を逞しくして居る間、逸
 作は二間程離れておとなしく直立して居た。おとなしくと言つても逸作のは只のおとなし
 さではない。宇宙を小馬鹿にしたような、ぬけぬけしいおとなしさだ。だから、太陽の光
 線とじか取引きである。逸作のような端正な顔立ちには月光の照りが相応しそうで、実
 は逸作にはまだそれより現世に接近したひと皮がある。そのせいか逸作も太陽が好きだ。

何処どこといつて無駄な線のない顔面の初老に近い眼尻かすの微かすかな皺しわの奥までたつぷり太陽の光を吸すっている。風が裾すそをあおつて行こうと、自転車じてんしゃが、人が、犬が擦すり抜けて通つて行こうと、逸作は頓とんじやく着じやくなしにぬけぬけと佇たちどまつて居る。これを、宇宙を小馬鹿にした形と、かの女は内心で評して居る。

——もう宜いいかいのかい。

逸作の平静せいじやうな声せい調ちやうは木の葉のそよぎと同じである。「死しの様ように静しずか」と曾かつて逸作を評したかの女の友人があつた。その友人は、かの女を同情するような羨うらやむような口調くちやうで言つた。だが、かの女はそれはまだ逸作に対する表面の批評だと思つた。逸作の静せい寂じやくは死魂しこんの静寂せいじやくではない。仮かりに機械かきに喩たとえると此この機械かきは、一個所、非常に精銳な部分があり、あとは使用を閑かんきやく却きやくされていると言つて宜よい。無口で鈍重な逸作が、対社会的な画え作さくに傑けつ出しゆつして居るのは、その部分が機敏きびんに働く職しやく能のうの現れだからである。逸作のこの部分の働きの原動力、それはあるときは画業えがに對しある時はかの女に對する愛であると云いうよりほかない。そしてある時は画業えがに對しある時はかの女に對してその逸作の非常に精銳な部分が機敏きびんに働いているのである。かの女も亦またそれを確實じつじやんに常に受け取つて居いるのである。だから、かの女は自分の妄想もうそうまでが、領土を広く持つて居る気がするのであ

る。自分の妄想までを傍そばで逸作の機敏な部分が、咀嚼そしゃくして呉くれる。咀嚼そしゃくして消化こなれたそれは、逸作の心か体か知らないが、兎とに角逸作の閑却された他の部分の空間にまで滲しみて行く——つまり逸作が、かの女の自由な領土であるということだ。かの女が、逸作の傍で思い切つて何でも言え、何でも妄想出来できるといふことが、逸作がかの女の領土である証拠であり、そういう両者の機能的關係が「円満な夫婦愛」などと、世人が言いふらすかの女等らの本体なのである。だが、かの女は「夫婦愛」などと言われるのは嫌いなのである。夫婦と言う字や発音は、なまなましい性欲の感じだ。「愛」と言うほのぼのとした言葉や字に相応しない、いやらしさをかの女は「夫婦」という字音に感じる。ただ、今はひとのことで或ある時、或る場合一寸ちよつと此の字が現われて来るのなら彼女は宜いと思う。芝居の仕草ぐさや、淨瑠璃じようるりのリズムに伴い、ともな「天下晴れての夫婦」などと若い水みづ々みずしい男女の戀愛の結末の一場面のくぐりをつける時に、たった一つ位くら此の言葉を使うのは、世話に碎くだけたなまめかしさを感じて宜いと彼女は思う。だが、もつと地味に、決定的に、質実に、その本質を指定することも出来ない組み合わせになつて相当、年月を經へた男女——少なくとも取り立てて男女などと感じなくなつた自分達だけは、子の前などでは尚な更さら「夫婦」なんてぶんぶんなまの性欲の匂においのする形容詞を着せられるのは恥はかしい。よく年とし若わかな夫が

自分の若い妻を「うちの婆ばあさん」などと呼ぶ、あれも何となく気取って居いるよういに思われ
るが、でも人の前で、殊ことに器量きりようの好よくない夫婦などが「われわれ夫婦」などと言うのを
聞くのをかの女は好まない。新聞や雑誌などで、夫婦という字を散見さんけんしても、ひとのこ
とどうでも宜よいようなものの、好ましいとはかの女は思わない。

逸作とかの女との散歩の道は進む。

——あたし、あなたに見せるものあるのよ。

——そうかい。

——何だか知ってる？

——知らない。

——あてなさい、な。

——あたらない。

——あれだ。太郎から手紙よ。

——おい、見せなさいよ。

——道のまん中じゃあないの。

——好いからさ。

——墓地へ行つて見せる。

かの女は袖そでのなかで、がさがさしてゐる息子の手紙を帯の間へ移す。くどく無い逸作は、或るものに食欲を出しかけたような唇を、一つ強く引き締めることによつて、其の欲望を制した。かの女のいたずら心が跳ね返つて嬉よろこぶ。

散歩に伴う生理調節作用として斯こならないが、かの女には快適なのだつた。

逸作が、他に向つての欲望の表現はくどくないのだ。然しかし、逸作の心に根を保っている逸作の特種とくしゆの欲望がある。逸作はそれを自分の内心に追求するに倦うまない男だ。逸作の特種な欲望とは極々限られた二三のものに過ぎないと言える。その一つが、今かの女に刺戟しげきされた。——息子に対する逸作の愛情は親の本能愛を裏付けにして実に濃こまやかな素晴らしい友情だとかの女は視みる。不精ぶしやうな逸作は、煩わづらわしい他人の生活との交渉に依よらなければ保たれない普通の友人を持たないのである。他の肉親には、逸作もかの女も若い間に、ひどいめに会つて懲こりて居る。その悲哀や鬱うつげん憤まじも交る濃厚な切実な愛情で、逸作とかの女はたつた一人の息子を愛して愛して、愛し抜く。これが二人の共同作業となつてしまつた。

逸作とかの女の愛の足ぶみを正直に跡付ける息子の性格、そしてかの女の愛も一緒に其そ

処を歩めるのが、息子が逸作にとつて一層うってつけの愛の領土であるわけなのだ。かの女と逸作が、愛して愛して、愛し抜くことに依つて息子の性格にも吹き抜けるところが出来、其処から正直な芽や、伶俐な芽生えがすいすいと芽立つて来て、逸作やかの女を嬉ばした。逸作やかの女は近頃では息子の鋭敏な芸術的感覚や批判力に服するようにさえなつた。だが、息子のそれらの良質や、それに附随する欠点も、世間へ成算的に役立つかと危ぶまれるとき、また不憫さの愛が殖える。

——おい、小学校の方でなく、こつちから行こうよ。

——何故。

——だって、子供達が道に一ぱいだ。

——早く、墓地へ行つて手紙見度いから近道行こうつてんでしよう。

——……………。

——え、そうでしょう。

——俺は子供きらいだ。

そうだった。かの女はそれを忘れて居たのだ。逸作が近道を行つて早く息子の手紙を見度いのも本当だろうが、逸作はたしかに、そろそろ子供に逢うのは嫌いだ。子供は世

の人々が言い尊ぶように無邪気なものと逸作もかの女も思つては居なかつた。子供は無邪気に見えて、実は無遠慮な我利我利なのだ。子供は嘘を言わないのではない。嘘さえ言えぬ未完成な生命なのだ。教養の不足して居る小さな粗暴漢だ。そして恥や遠慮を知る大人を無視した横暴な存在主張者だ。(逸作もかの女も、自分の息子が子供時代を離れ、一つの人格として認め得た時から息子への愛が確立したのだ。)本能以各々その親達が愛するのは宜い。然し、逸作達が批判的に見る世の子供達は一見可愛らしい形態をした嫌味な悪どい、無教養な粗暴な、而かもやり切れない存在だ。

——でもパパは、童女型だの、小児性夫人だのつてカチ(逸作はかの女を斯う呼ぶ)を鼻根にするではないか。

——大人で童心を持つてると、子供が子供のまんまなのとは違うよ。大人で童心を持つてるとその童心を寧ろ普通の子供はちつとも持つてないんだ。だから子供のうちから本当の童心を持つてると子はやっぱり大人で童心を持つてると人と同じく勘ないんだよ。

斯うした筋の通らぬような、通つたような結論を或時二人がかりでこしらえてしまつた。

道の両側は文化住宅地だつた。かの女達が伯林の新住宅地で見て来たような大小の文

化住宅が立ち並んでいる。だが、かの女等は、此の日本の小技工のたくみな建築が、寧ろ伯林のよりも効果的だと考えられるのである。日本で想像して居たより独逸人の技巧は大まかだ。影か、骨か、何かが一けた足りなくて、あの徒らに高い北欧の青空の下に何処か間の抜けた調子で立ち並んでいるのであった。日本の建築が独逸のそれを模倣しているのは一見明白であるが、実物で無い、独逸建築の写真で見えた感覚から、多く此の抜け目の無い効果を学びとつたのであろう。かの女達が伯林で、現在眼の前の実物を観乍ら、その建築物の写真の載つた写真帖など見並べると、驚く程、其の写真の方が、線の影や深味が、精巧な伶俐な写術によって附加されている。その写真帖を、そのまま、日本へ持つて帰り、日本の人に見せるのは、少し、そらぞらしい嘘をつくようなうしろめたさを覚えた。が、それかと言つて、その写真が計画的に修正でもしてあるわけでもなし、それは何処までも、その独逸建築をありの儘に写した写真なのだから仕方がない。人間の顔を写してもそんなのだ、平たい陰影の少ない東洋人の顔より、筋骨的な線のはつきりした西洋人の顔が多く効果的に写る——ともかく日本の様式建築が、独逸の効果的写真帖の影や深味迄を東洋人の感覚で了解し、原型伯林の建築より効果を出している。それが、日本の樹木の優雅なたたずまいや、葉の濃かさの裏表に似つかわしく添って建っているのだ。

——何処の国の都会の住宅地でもそうだけど、五万円や八万円かかった住宅はどっさり建つてるでしょう。それでいて門標もんびょうを見れば、何処の誰だか分らない人の名ばかりじやないの。世の中にお金が無いななんて嘘のような気がするのね。

——……………。

——何故なぜだまって笑つてらつしやるの。

——だって、君にしちやあ、よくそんな処ところへ気が付いたもんだ。

四辺しへんの空気が、冷え冷えとして来て墓地に近づいた。が、寺は無かった。独立した広い墓地だけに遠慮が無く這入はいれた。或る墓標そはの傍には、大株の木蓮もくれんが白い律義りちぎな花を盛り上げていた。青苔あおこけが、青粉あおこを敷いたように広い墓地内の地面を落ち付かせていた。さび静そまった其の地上にはつと目立つかなやしおらしい夏草を供そなえた新古の墓石や墓標が入り交つて人々の生前と死後との境に、幾ばくかの主張を見せているようだ。尠すくなくともかの女にはそう感じられ、ささやかな竹垣や、巖いめしい石垣、格子こうしのカナメ垣の墓囲いも、人間の小さい、いじらしい生前と死後との境を何か意味するように見える。

——生きて居いるものに取つては、茲こゝが、死人の行った道の入口のような気がして、お墓はやつぱりあつた方が宜よいのね。

——そうかな、僕あ斯んなもの面倒くさいな。死んだら灰にして海の上へでも飛行機でばら撒いてもらった方が気持が好いな。

いつか墓地の奥へ二人は来て居た。

——どれ見せな。

——息子の手紙？ 執念深く見度がるのね。

——お墓の問題よりその方が僕にや先きだ。

其処そこに転ころがつている自然石の端はしと端へ二人は腰を下ろした。夏の朝の太陽が、意地悪に底冷えそこひのする石の肌をほんのりと温め和なごめていた。二人は安気あんきにゆっくり腰を下ろして居られた。うむ、うむ、と逸作は、旨いものでも喰たべる時のような味覚のうなずきを声に立てながら息子の手紙を読んで居る。

——ねえ。パパ。

——うるさいよ。

——何処どこまで読んだ？

——待て。

——其処そこに、ママの抒情じよじょう的世界を描けつてところあるでしょう。

——待ち給え。^{たま}

逸作は一寸腕を扼してかの女を払い退けるようにして読み続けた。

——ねえ、ママの抒情的世界を描きなさいって書いて来てあるでしょう。ねえ、私の抒情的世界って、何なの一たい。

——考えて見なさい自分で。

——だってよく判らない。

——息子はあたまが良いよ。

——じゃ、パリへ訊いてやろうか。

——馬鹿言いなさんな、またたしなめられるぞ。

——だって判らないもの。

——つまりさ、君が、日常嬉んだり、怒ったり、考えたり、悲しんだりすることがあるだろう。その最も君に即したことを書けつて言うんだ。

——私のそんなこと、それ私の抒情的世界つて言うの。

——そうさ、何も、具体的に男と女が惚れたりはれたりすることばかりが抒情的じゃないくらい君判んないのかい。息子は頭が良いよ。君の日常の心身のムードに特殊性を認め

てそれを抒情的と言つたんだよ、新しい言い方だよ。

——うむ、そうか。

かの女のぱっちりした眼が生きて、巴里の空を望むような瞳の作用をした。

——判つてよ、よく判つてよ。

かの女は腰かけたまま足をぱたぱたさせた。

かの女の小児型の足が二つ毬のように弾ずんだ。よく見ればそれに大人の筋肉の隆起がいくらかあつた。それを地上に落ち付けると赭茶の駒下駄の緒の廻りだけが括れて血色を寄せている。その柔かい筋肉とは無關係に、角化質の堅い爪が短かく尖の丸い稚ない指を屈伏させるように確乎と並んでいる。此奴の強情！と、逸作はその爪を眼で押えながら言つた。

——それからね。君の強情も。

——あたしの強情も 抒情的のなかに這入るの。

——そうさ。

——そんな事言えば、いくらだつてあるわ。私が他所から独りで帰つて来る——すると時々パパがうちから出迎えてだまつて肩を押えて眼をつぶつて、そして開けた時の眼が泣

いている。こんなことも？

——うん。

逸作は一寸ちよつと面倒らしい顔をした。

——そう、そう、その事ね。私たった一度山路さんここで話しちやつた。そしたら山路さんも奥さんも不思議そうな顔して、「何故なぜでしょう」って言うの。「大方おおかた、独りで出つけない私が、よく車にも轢ひかれず犬にも噛かまれず帰つて来たつて不憫ふびんがるのでしょうか」つて言つたら、物判ものわかりの好よい夫婦でしょう。すっかり判つたような顔してらしたわ。

「私のこと、対世間的なことになる」と逸作は何でも危あぶなगरります」つて私言つたの。こんな事も抒情的なの。

——だろうな。

逸作は自分に關することを、じかに言われるとじきにてれる男だ。

——序ついでに私、山路さんここでみんな言つちまつた。世間で、私のことを「まあ御氣丈おきじょうな、お独り子を修しゆぎよう行ための為とは言え、よくあんな遠えんぼう方へ置いてらした。流石さすがにあな方はお違いですね。判つてらつしやる」つて、世間は單純にそんな褒ほめ方ばかりしてま
す。雑誌などでも私を如何いかにも物の判つた模範的な母親として有名にしちまいましたが、

だが一応はそういうことも本当ですが、その奥にまだまだそれとはまるで違った本当のところがあるのですよ。そんな立ち勝った量見からばかりで、あの子を巴里へ置いときませんって、——巴里は私達親子三人の恋人です。三人が三人、巴里に居るわけに行きませんから、せめて息子だけ、巴里って恋人に添わせて置くのを心遣りに、私達は日本つて母国へ帰って来ましたの。何も息子を偉くしようとか、世間へ出そうとか、そんな欲でやつとくんでもありません。言わば息子をあすこに置いとくことは、息子に離れてる辛い気持ちとやりとりの私達の命がけの贅沢なんですよ。………てね。

かの女は自分がそう言つて居るうちに、それを自分に言つてきかせて居るような気持ちになつてしまつた。

——ねえパパ、こんな処へ朝つかから来て、こんなこと言つたりしてることも私の抒情的世界つてことになるんでしようね。

——ああ、当分、君の抒情的世界の探索で賑かなことだろうよ。

逸作は、息子の手紙を畳んだりほぐしたりしながら比較的实际的な眼付きを足下の一処へ寄せて居た。逸作は息子に次に送る可なりの費用の胸算用をして居るのである。逸作の手の端ではじけている息子の手紙のドームという仏蘭西文字の刷つてあるレタ

パーパーをかかぬ女はちらと眼にすると、それがモンパルナツスの大きなキャフェで、其處に息子と仲好しの女達も沢山居て、かかぬ女もその女達が可愛くて暇さえあれば出掛けて行つて紙つぶてを投げ合つて遊んだことを懐しく想ひ出した。

逸作が暫く取り合はないので、かかぬ女も自然自分自身の思考に這入つて行つた。

暫くしてかかぬ女が、空に浮く白雲の一群に眼をあげた時に、かかぬ女は涙ぐんで居た。

かかぬ女は逸作と息子との領土を持ち乍らやつぱりまだ不平があつた。世の中にもかかぬ女自身にも。かかぬ女はかかぬ女の強情をも、傲慢をも、潔癖をも持て剩して居た。そのくせ、かかぬ女は、かかぬ女の強情やそれらを助長さすのは、世の中なのだと思つて居る。

人懐かしがりのかかぬ女を無条件に嬉ばせ、その尊厳か、伶俐か、豪華か、素朴か、誠実か、何でも宜い素晴らしくそしてしみじみと本質的なものに屈伏させられるような領土をかかぬ女は世の中の方にもまだ欲しい。かかぬ女はそういうものが稀にはかかぬ女の遠方に在るのを感じる。然し遠いものは遠いものとして遥かに尊敬の念を送つて居たい。わざわざ出かけて行つて其處にふみ入つたり、附きまつたりするのは悪どくて嫌だ。かかぬ女はそんな空想や逡巡の中に閉じこもつて居る為に、かかぬ女に近い外界からだん

だんだん遠ざかってしまった。かの女は閑寂な山中のような生活を都会のなかに送って居るのだ。それが、今のところかの女に適していると承知して居る。だが、かの女はそれがまた寂しいのだ。自分の意地や好みを立てて、その上、寂しがるのは贅沢と知りつつ時々涙が出るのだった。

まだその日の疲れの染まない朝の鳥が、二つ三つ眼界を横切った。翼をきりりと立てた新鮮な飛鳥の姿に、今までのかの女の思念は断たれた。かの女は飛び去る鳥に眼を移した。鳥はまたたく間に、かの女の視線を蹴つて近くの小森に隠れて行つた。残されたかの女の視線は、墓地に隣接するS病院の焼跡に落ちた。十年も前の焼跡だ。焼木杭や焼灰等は塵程も残っていない。赤土の乾きが眼にも止まらぬ無数の小さな球となって放心したような広い地盤上の層をなしている。一隅に夏草の葉が光って逞ましく生えている。その叢を根にして洞窟の残片のように遺つて居る焼け落ちた建物の一角がある。それは空中を鏝形に区切り、刃型に刺し、その区切りの中間から見透す空の色を一種の魔性に見せながら、その性全体に於ては茫漠とした虚無を示して十年の変遷のうち根気よく立っている。かの女は伊太利の旅で見た羅馬の丘上のネロ皇帝宮殿の廢墟を思い出した。恐らく日本の廢園に斯うまで彼処に似た処は他には無からう。

廢墟は廢墟としての命もちつゝ羅馬市の空に聳えてとこしへなるべし。

かの女は自分が彼処をうたつた歌を思い出して居た。

と、何処か見当の付かぬ処で、大きなおならの音がした。かの女の引締まって居た気持ちを、急に飄々^{ひょうひょう}とさせるような空漠とした音であった。

——パパ、聞こえた？

逸作とかの女は不意に笑つた顔を見合わせて居たのだ。

——墓地のなかね。

——うん。

逸作はあたりまえだと言う顔に戻つて居る。

——墓地のなかでおならする人、どう思うの。

かの女は逸作を覗くようにして言った。

——どうつて、……………君はどう思う。

——私？

かの女は眼を瞑つて渋め面して笑い直した。そして眼を開いて真面目に返ると言った。

——余つほど現実世界でいじめられてる人じゃないかしら。普通ならお墓へ来れば気が

引締まるのに。お墓へ来て気がゆるんでおならをする人なんて。

かの女達が腰を上げて墓地を出ようとすると、其処へ突然のようにプロレタリア作家甲野氏が現われた。

朝は不思議にどんなみすぼらしい人の姿をも汚なくは見せない。その上、今日の甲野氏はいつもとよりずっと身なりもさっぱりして居る。

——やあ。

——やあ。

男同志の挨拶——。

かの女は咄嗟の間に、おならの嫌疑を甲野氏にかけてしまった。そしてそのために突き上げて来た笑いが、甲野氏への法外な愛嬌になった。そのせいか一寸僻み易い甲野氏が、寧ろ彼から愛想よく出て来た。

——奥さんには久し振りですな。

——散歩？

——昨夜晩くまでかかって××社の仕事が終わったので、今朝早く持って来て来ました。

——奥さんがお亡くなりになってからお食事なんか如何なさいますの。

——外で安飯を喰べてますよ。

——大變ね。

——独り者の氣樂さつて処もありますよ。

墓地を出て両側の窪みに菌の生えていそうな日蔭の坂道にかけると、坂下から一幅の冷たい風が吹き上げて来た。

——どうです、僕の汚い部屋へ一寸お寄りになりませんか。

——有難う。

逸作もかの女も甲野氏の部屋へ寄るとも寄らぬとも極めないでぶらぶら歩いた。道が、表街近くなつた明るい三つ角に来た時、甲野氏は、自分の部屋に寄りそうもない二人と別れて自分の家の方へ行こうとしたが、また一寸引きかえして来て、殊にかの女に向いて言つた。

——僕、昨日の朝、散歩の序に戸崎夫人の処へ寄つて見ましたよ。

——そう、此頃あの方どうしてらっしゃる？

——相変らず真赤な洋服かなんか着てね、「甲野さんのようなプロレタリア文学者と私のような小説家と、どっちが世の中の為めになるかってこと考えて御覽なさい。世の中

には食えない人より食える人の方がずっと多いのだから、私の小説は、その食える人の方の読者のために書いてるんだ。」と、斯うですよ。は、は、は、は。

かの女は、華美でも洗練されて居るし、我儘でも卒直な戸崎夫人の噂さは不愉快でなかつた。そういう甲野氏も僻み易いに似ず、ずかずか言われる戸崎夫人をちよいちよい尋ねるらしかつた。

——あなたの噂も出ましたよ。あなたをたんと褒めて居たが、おしまいが好いや、——
だけどあの方あんなに息子の事ばかり思つてんのが気が知れないって。

かの女はふつと吹き出してしまった。かの女は子を持たない戸崎夫人が、猫、犬、小鳥、豆猿と、おおよそ小面倒な飼いを体の周りにまつわり付けて暮らして居る姿を思い出したからである。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五卷」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

※表題は底本では、「かの女《じよ》の朝」となっています。

※「二三丁」「量見《りようけん》」「鍵形《かぎがた》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年2月17日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かの女の朝

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>